学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１０年７月２４日
文責：ＪＵＮ

子どもが学ぶとはどういうことだろう

１．　教えることに傾斜している教師の意識

教師の意識は、教えることに傾斜しています。学ぶのは子どもですから、子どもの中に「学び」の意識と意欲がなければいけないし、その深まりには子ども自身の思考と探求が不可欠です。にもかかわらず、子どもの意欲のあるなしにかかわらず勉強を強いる授業、子どもに探求させず教え込む授業がかなりあるのです。

勉強が好きな子どもなんていない、意欲が出てくるのはいつのことやらわからない、あれやこれやとまどろっこしく考えさせる時間があれば早くわからせるほうが学力はつく、教えることに傾斜している教師は大抵このようなことを言いますし、それはもっともなことのようにきこえます。しかし、本当に子どもには学ぶ意欲はないのでしょうか。たとえ勉強はきらいだと言ったとしても、何かを知ること、何かができるようになることを喜ばないのでしょうか。あれこれと回り道のように探求することは学力を低下させるのでしょうか。そして、早くわかることはそんなによいことなのでしょうか。

目をきらきらさせて学んでいるある学級の子どもにそっと尋ねたことがあります。「どうしてそんなに楽しそうなの？」と。すると、その子どもは、少し考えてから次のように答えました。「遊んでいるように楽しいから」

遊んでいるように楽しい授業。それは、どういう授業だったのでしょうか。遊びが楽しいのは没頭できるからです。そして、遊んでいるときは自らの頭と体を自らの意思で縦横無尽に働かせています。ということは、この授業はそれができる授業だったということになります。

勉強を強いられた授業でそういう状態が生まれるわけがありません。授業を見たわたしの印象では、その授業は、教師のことばよりも子どもの語ったことばのほうがはるかに多くしかも魅力的でした。子どものことばが次々と連鎖し、響き合い、そのたびに新しい気づきが生まれる、そのダイナミックさに子どもたちは魅了されているように思われました。

そこには、子どもの学ぶ意欲と、子どもの探求心が確かに存在していました。この授業を見ながらわたしは思いました。教師の授業一つでこんな子どもの姿が見られるのなら、一人でも多くの先生方に「子どもが学ぶとはどういうことなのか」を、もっと厳密に考えてもらわなければと。

２.「学び」が存在する授業の条件

教室に集うどの子どもの内にも「学び」が生まれる授業とはどういう授業なのかと問われて、それを語り切ることはまず難しいでしょう。これとこれとこれがこのように存在している授業なのですと、理路整然と並べたてて事足りるというものではないからです。多様に複雑に生まれ出る人の営みはことばで語り尽くせないのです。けれども、少なくともこういうことが存在していなければいけないのではないかということは気づくことができます。

ある学校に招かれたとき、この「子どもが学ぶとはどういうことか」をどうしても先生方に語りたいと思いました。とは言っても、それを一般論で語ったのでは先生方に響かないでしょう。先生方に届くように語るには、その日の授業の事実とつなげて語ることです。そう考えたわたしが語った「『学び』が存在する授業の条件」は、以下のようなものでした。

・取り組む課題に魅力があること
・探求があること
・学び合いがあること

わたしは、この一つひとつについて、その日この学校で見た授業の事実に即して語ったわけですが、それをここに再現することはかなりの分量を必要とするためできませんが、この３項目にどういう意味合いがあるのかだけは述べようと思います。

① 取り組む課題に魅力があること

まず、課題についてですが、何を考えるのかがない授業なんてないでしょう。ですから、教師は、授業を始めてさほど時間が経過しないうちに、この時間で何を考えるのか、つまり本時の課題を提示します。そのこと自体、間違いではありません。それは必要なことです。ところが、かなりの授業の課題提示に魅力がないのです。自分が子どもだったら、この１時間が楽しみにならないだろうと思ってしまうのです。それはどうしてでしょうか。

それは、子どもの意欲につながらない持ち出し方をしているからです。子どもの考え方や関心事、その時の子どもの状態とずれているからです。ですから、教師の一人相撲になってしまうのです。

そもそも教師は、教えたいと思うあまり、学ぶ子どもの気持ちに鈍感です。子どもたちの意識はどういうものなのか、このことに関しては子どもとはどういう考え方をするものなのか、いえ、そもそも子どもは何をどう学びたがっているのか、そういったことを十分に考えて授業に臨んでいないのです。ただ教師としてどう教えるかだけを考えて授業に臨んでいるのです。ですから、そういう教師の授業は、課題が提示される授業の始まりがつまらなく、子どもたちの学ぶ意欲は始まってものの１０分もしないうちに寂しいものになってしまうのです。

物語を読む授業のように、まずは一人ひとりの子どもが感じたこと、考えてみたいことを出し合うことから始めてその時点で課題らしきものが姿を現さない授業もありま

す。そういう授業であっても、子どもの発言の繰り返しだけで学びが生まれるわけではなく、そういう考えの聴き合いの中から、これこそ本当に突き詰めたいと思うような何かが出現しなくては読みの探求は楽しめません。

子どものなかに「学び」が生まれるとき、そこに必ず「子どもにとって魅力ある課題」が存在します。毎時間毎時間、「どうしてだろう？」「どうやったらいいのだろう？」「こういうことだと思うんだけど本当にそうだろうか？」「このわけ、どうしても知りたい」と思うようなものを目の前に示されたら、子どもは、授業を楽しみにするようになります。前述した「まるで遊んでいるみたい」と言った子どもの教室はきっと「魅力ある課題」が毎日のように登場する教室なのでしょう。

しかし、それはそれほど簡単なことではありません。教師自身が教材に対してかなり深く入り込んでいなければ、魅力的な課題は提示できません。その一方で教室の子ども一人ひとりの関心や考えを察知する感性がないと、子どもの心に響く形で課題を持ち出せません。それは、テキストが見える教師、子どもが見える教師ということであり、この「見える」ようになるということが一朝一夕で身につくものではないのです。けれども、子どもの学びが生まれる授業をしたいと思うなら、教師は、この「見える」感覚をなんとしても身につけなければならないでしょう。

② 探求があること

二つめに掲げた「探求のある授業」についてですが、それは、学びが生まれているとき、子どもたちは必ず何かを探求しているということです。

「学ぶ」ということは「わかる」ということとつながってはいるのですが、わかれば学んでいるかと問われると、うなずくことはできません。簡単にわかってしまうことで学びが生まれなかった事例が山ほどあるからです。

かつて、ある大学の附属中学校を訪れたときのことです。附属学校の校長は大抵その大学の教授ですが、わたしが訪れた学校の校長は数学の教授でした。昼休み、校長室で二人だけになる時間がありました。わたしたちはいろいろな話をしたのですが、ふとわたしは、次のようなことを尋ねました。

「数学をしていて、いちばん楽しいときはどういうときですか？」

すると、その教授は即座に答えました。

「わからないときですね」

「ええっ、解けなかった難問が解けた、つまりわかったときじゃないのですか？」

「いえ、わかってしまったらもうそれでおしまいです。難問に挑戦しているときがいちばん楽しいのです。数学の醍醐味です」

それをきいてわたしは深くうなずきました。解けない難問に挑戦しているとき、そこにわたしの言う「探求」があると思ったからです。こうじゃないか、これでどうだろう、ああ、だめだ、そうじゃない、では、こうじゃないかという、そういう思考は行きつ戻りつしてなんともまどろっこしいものです。でも、その回り道のような「探求」がいちばん楽しいのです。そして、その探求の中で、学びが姿を現すのです。

それにしては、学校の教師は、わからせることを急いでいませんか。わかることがも

っともよいことだと思っていませんか。効率よくわかる授業をしようとしていませんか。探求させないうちにやり方を教えてしまっていませんか。つまずかないように教えることがもっともよい指導だと勘違いしていませんか。

子どもに何かをやらせた後、教師は必ずと言っていいほどこう尋ねます。「わかった人？」「できた人？」と。「わからなくて困っている人？」とは尋ねません。そこには、何が正しい考え方でどうすれば正解になるのかを早く指導しようという教師の思惑が存在しているのです。それでは、学ぶ楽しさは味わえません。わかったという小さな優越感が生まれるだけです。

子どもの「探求」をこよなく大切にし、その「探求」につき合い、子どもといっしょに「発見」の瞬間を味わえない教師には、「学び」のある授業はできません。「わからなさ」「間違い」は「探求」の鍵です。子どもの「学び」がわかっている教師は、そのことがわかっています。

③ 学び合いがあること

このように、探求することで学びが生まれるわけですが、その探求をすべての子どもに、自分だけで遂行するように仕向けたらどうなるでしょうか。きっと、考えることに行き詰って投げだしてしまう子どもが続出するでしょう。それでは学びが生まれないどころか、学ぶ意欲も減退していきます。そうならないために、すべての子どもの探求を可能にし、発見の喜びを味わわせるために、なんとしても必要なこと、それが「学び合い」です。

かつてわたしのクラスのある子どもが「ひとり学びのときにどうしてあんなことを考えてしまったのだろう。友達と考えるから授業がおもしろい」と言ったことがありますが、この一言に、協同的な学びの大切さが凝縮されています。学力の高低にかかわりなく、ともに考えてくれる他者がいるからこそ、子どもたちは探求から逃げないで学びを求めていけるのです。

協同的な学びは、ただ学びを持続させるためにだけ必要なのではありません。他者と考え合うことで、他者の考えとつなげることで、ひとりだけでは考えられないようなことを見つけ出すことができます。学び合いは無限の宝庫です。

わたしは、子どもたちの心と体を、他者とつながり合えるものにすることこそ、義務教育の責務だとも考えています。長い人生を歩む子どもたちはその人生でどれだけ多くの人と出会いともに生きていくことになるでしょうか。そこに他者とつながる心と体が存在していたら、その他者との出会いはきっとその子どもの人生を豊かなものにしてくれるでしょう。「学び合い」は、そういう長い人生にもつながっているのです。

その「学び合い」を実現するうえで、教師が常に心がけていたいのは「つなぐ」ということです。「教える」とか「わからせる」ということよりも、考えと考えをつなぐ、考えとテキストをつなぐ、前に学んだことと今の考えをつなぐ、これからの学びとつなぐ、この意識が大変重要です。

もちろんグループの学びを取り入れることは必須ですが、それだけでは学びは生まれません。「つなぎ」ができるかどうか、それがもっとも大切です。